

資本主義の安定性の理論と不安定性の理論

松田正彦

はじめに

商品が市場で売りに出され売買される場合、表現価格と実現価格とがある。それぞれに対応して商品には表現された交換力と実現された交換力があるということになる。社会の存続という持続的な状態を前提にし、とりあえず後者の実現された交換力について考えると、それにも安定した交換力と安定しない交換力とがあるということになる。この交換力は価値と言い換えてもよいのであるが、それが安定的なものか不安定なものかは、社会的な生産編成にそれが組み込まれているか、そうでないかによる。

資本主義経済の一般規定としての原理論は、この生産編成が均衡的に形成されるものとして説かれる。それは、形成されるプロセスと形成された結果とからなるが、その両方を含む経済システムである純粋資本主義は、結局は安定的なものとして措定される。では、そのような安定的なシステムを論証する原理論のほかに、なぜもう一つの不安定性を含意する段階論が必要となるのであろうか。本稿ではそのような問題を、山口重克の論稿を参考にしながら考えてみることにしたい。

1、純粋資本主義の安定性

経済学の原理論が説く純粋資本主義は、その経済システムの安定性を示すものと考えられるが、それとは逆の主張をする論者もいる。山口重克は「資本主義の本質は不安定性であり、原理論はそれを強調しなければならない」¹⁾として、次のように述べている。「社会としては安定が必要であるが、純粋資本主義には社会としての安定性がない。というよりも社会がないと言ったほうがよいかも知れない」²⁾。山口の主張に対し、私は「資本主義の本質は不安定性である」と指摘するにしても、原理論はそれを強調するものではなく、むしろそれとは反対に安定性を示すものと考えている。

山口は、「資本主義の本質」である不安定性は、原理論の次のような箇所で見られるとしている。

「資本主義経済の不安定性は原理論ではどこに現れているか。象徴的には景気循環、とりわけ信用恐慌につづく不況、その結果としての失業、貧困である。この失業と貧困は不断に存在し累積するものではなく、循環的に発生しては解消される現象ではあるが、このこと自体が不安定性の一側面である。循環的に解消される点に着目してそこに資本主義の自己再生能力を見ようとする見解もあるのかもしれないが、どのような周期で自律的に回復・解消するのかということは理論的には確定が困難である。不況から好況への転換は、放置しておけば何れは生じるとしても、不況をどのくらい放置しておけば生じるのかが不明で、したがってその間は失業と貧困が継続し、餓死者が出るかも知れない。暴動が発生するかも知れない。このような不安定性、不確定性が資本主義経済の本質であることがまず確認されることが必要であろう」³⁾。

この場合、「失業と貧困」が「循環的に解消される点に着目してそこに資本主義の自己再生能力を見よう」とすれば、純粋資本主義の「安定性」を強調することになる。他方、「不況から好況への転換」において「その間は失業と貧困が継続し、餓死者が出るかも知れない。暴動が発生するかも知れない」という点を重視すれば、「不安定性」を強調することになる。この「その間」に社会に起きる失業、貧困、さらには餓死、暴動という、いわば社会にとっての痛みを原理論はどのように取り扱うかが問題となる。失業と貧困が生じる「その間」のことは、無視ないしはせいぜい家族内で扶養し合って乗り切ると解釈するか、無視できないものとして、容易には乗り切ることのできない問題が資本主義にはあると原理論で指摘するか、である。

この問題は、原理論は何を説き何を目的としているかということに帰着する。原理論は資本主義社会に発生する問題を摘出し、それに対する何らかの解決方法を提示するという社会理論であろう

か。私は、原理論はそのような問題の提起を課題としているのではない、と考えている。そういった問題意識を背後にもつことはあっても、社会科学ないし経済理論としての原理論は、資本主義経済の仕組みと構造を明らかにするものであろう。その点について、原理論は資本主義経済の法則性を論じるものであって、あたかも繰り返すかの如くそれを説くのが法則性の証明の仕方である、と少なくとも宇野学派では従来から主張してきたように思われる。

その際、法則性を明らかにしようとする対象は、資本主義社会であろうか、あるいは資本主義経済であろうか。私は、前者のような社会そのものではなく、後者の資本主義経済というシステムを原理論は解明の対象としていると理解している。つまり、原理論は経済システムという形式を示しその構造を解明する研究分野であって、資本主義経済という形式ないし形態のもと運動メカニズムや構造、機能を明らかにすることを目的としていると考えているのである。

原理論の目的がこのようなものであるとすれば、先の「その間」に起きる社会の痛みについては、その存在を強調するというよりは、「循環的に解消される」仕方の方を重視することになる。山口は「純粋資本主義には社会としての安定性がない。というよりも社会がない」と述べているが、その通りであり、原理論で説く純粋資本主義には「社会がない」といってよい。社会を対象とすれば「安定性がない」ことを問題にせざるをえないが、社会を対象としないでシステムの解明を課題とすれば、そこでの安定性は措定できるのである。

つまり、原理論で説く純粋資本主義は、社会がなくいわば形式だけの存在であるため安定性があるものとして論じることができるが、資本主義社会を対象にすると、安定性を問題とせざるをえないわけである。「社会としては安定が必要」なのであって、それゆえ安定させるための仕組みが必要となるといえよう。山口も「資本主義社会には安定化装置としての制度が必要になる」とし、「段階的、地域的に異なる安定化装置としてのサブシステムを取り込んだ理論としての段階論・類型論がこの安定化装置の現実的な役割を明らかにする」⁴⁾と論じている。ただ、「不安定な本質が

明らかにされていないと、この制度の必要性も役割も明らかにならない」⁵⁾と述べ、その「不安定な本質」を原理論が示すと指摘しているのである。だが、「不安定な本質」を原理論が直接示すことになるであろうか。

2、資本主義社会の不安定性

山口は、「従来、宇野原理論の理解の仕方として、原理論ないし純粋資本主義論は、景気循環を論証したことによって資本主義経済が自律的かつ持続的に展開可能な側面を持っている点を論証しているというものがあつた」としたうえで、「宇野の原理論が、独自の価値法則論＝自律的均衡編成論に力点を置きすぎて、それが景気循環という特有な過程、つまり一時的にせよ失業・貧困を伴うという重大な欠陥を持つシステムである点を余り強調しなかつた点に問題があつたのかも知れない」⁶⁾と論じている。それに対し、私は原理論においては宇野の「自律的均衡編成論」を継承すべきと考えている。山口は「景気循環には恐慌→不況の過程で資本主義経済の資本・賃労働関係が再建され、新たな蓄積様式が再構築されるというポジティブな意味があることは確かであるが、宇野派の内部には、このことによって資本主義社会の永続性が保障されているかのように理解する傾向があつたのが問題だつたのではないかと思われる」⁷⁾と述べている。

だが、「恐慌→不況の過程で資本主義経済の資本・賃労働関係が再建され、新たな蓄積様式が再構築されるというポジティブな意味」を宇野の原理論が説いてみせたことと、「資本主義社会の永続性が保障されているかのように理解する」こととは別である。「資本主義経済の資本・賃労働関係が再建され、新たな蓄積様式が再構築される」というのは、あくまでも経済システム上でのことであって、「資本主義社会の永続性」とは別問題といつてよい。

「社会の永続性」を問題とする場合、その社会の中の人間を考えざるをえない。先の山口の指摘である「不況から好況への転換」において「その間は失業と貧困が継続し、餓死者が出るかもしれない。暴動が発生するかもしれない」というのも、この人間という観点から捉え直したものであろう。そのような観点からすれば、人間とその集合

体である社会にとって我慢できない状況が生じ、社会の永続性が保障されないという事態が発生する可能性があるということであろう。元来人間にとって、資本主義ないし市場経済には二つの問題があると考えられる。一つは山口の主張する、「恐慌→不況の過程」での「失業と貧困が継続し、餓死者が出るかもしれない。暴動が発生するかもしれない」という機構面の問題であり、もう一つは、人間は市場原理だけでは生きていけないという人間本性の問題である。

この両者は関連する問題といってよく、それらは、市場での商品売買という形式だけでは人間の生活全体を処理することはできず、そのため社会の維持も商品経済以外の要素が必要になるということの意味している。事実、一方で社会の中で市場は非市場を分解・解体する力を持ち、歴史的にもその分解が進行してきたのであるが、他方で実際は分解・解体し切れない面が、つまり市場化に抵抗する面が人間や社会には残るのである。あるいは、市場システムは分解できない部分をかえって利用するということすら行う。このように人間や社会という観点から捉えれば、市場によって分解し切れない部分が社会には存在し続けるのであって、その結果、市場は過去もそうであったし、そしてこれからもそうであるように、限定的な存在でしかないわけである。その点からすれば、「資本主義社会の永続性が保障されている」わけではないといえよう。ただ、それは原理論が説くことではない。原理論は社会の永続性の可否を論じるのではなく、システムのメカニズムを明らかにするのが目的だからである。

原理論で説く経済システムの中では、「失業と貧困」は生じてても、人間は甘んじてそれを受け入れることが前提される。あるいは市場の原理ですべての行動が律せられる人間が前提される。そのような前提を置けば、システムは永続性が保障されるのである。実際、資本主義にはそのような疎外的な関係やそれを体現する人間を再生産する面があり、その限りでは資本主義の安定性は維持される一面がある。原理論で説く純粋資本主義は、この点を極限まで延長した事態を想定しているのであり、したがってそこではシステムの安定性なり永続性なりが保障されるといってよい。それに対し、人間の主体性を考えれば、「失業と貧困」

が生じた場合、甘んじてそれを受け入れることはできないであろうし、あるいは市場の原理以外の規範を併せ持って行動する人間も存在するのである。そういう人間の集合体である資本主義社会は不安定なものとなる。つまり、人間の主体性や社会という観点から捉えれば、資本主義社会は不安定だということになるであろう。それに対し、疎外的な人間を前提したシステムでは安定性が保障されるのであり、純粋資本主義というのはこのような経済システムを指しているわけである。

3、原理論と段階論

山口は「社会としては安定が必要であるが、純粋資本主義には社会としての安定性がない」とし、「故に資本主義社会には安定化装置としての制度が必要になる。不安定な本質が明らかにされていないと、この制度の必要性も役割も明らかにならない。段階的、地域的に異なる安定化装置としてのサブシステムを取り込んだ理論としての段階論・類型論がこの安定化装置の現実的な役割を明らかにする。宇野の原理論＝純粋資本主義論は純粋経済理論であって社会理論ではないから、社会理論としては虚構の理論である。現実論としての社会理論であるためにはサブシステム論が必要になる所以である」⁸⁾と述べる。山口は、純粋資本主義は不安定であり、そのため「段階的、地域的に異なる安定化装置としてのサブシステム」が必要であるとしている。確かに「宇野の原理論＝純粋資本主義論は純粋経済理論であって社会理論ではない」し、「社会理論としては虚構の理論である」といってよい。むしろ「虚構の理論」であるから、システムとしての安定性を保障できると私は考えているので、「虚構の理論」である純粋資本主義には「安定化装置としての制度が必要になる」とはいえない。「安定化装置としての制度が必要になる」のは、人間や社会を前提にした「社会理論」によって資本主義社会を捉えた場合である。そこでは、資本主義社会は不安定な社会であることが明らかにされる。不安定な社会には「安定化装置としての制度」がなければ、その社会は維持・存続できないであろう。

さらに山口は、「純粋資本主義というのはいわば裸の資本主義である」⁹⁾と言う。「はじめから制度という衣服をまとっていると、どうして衣服

が必要なのか、どこにどのような種類の衣服が必要なのかが分からない。本質が不安定でないし不確定性であることが確認されれば、制度がこの欠陥を除去ないし緩和し、体制を保護する役割を持つものであることが確認出来る¹⁰⁾と説く。「本質」というのが原理論で説く純粋資本主義についての内容であるとすれば、それは「不安定でないし不確定性」であるとはいえないように思われる。ただ、社会的生産編成が形成されるプロセスでは「不安定でないし不確定性」は不断に存在する。しかし、それを通して実現される結果についていえば、「本質」は安定的だといってよい。それでは、安定的だから「欠陥を除去ないし緩和し、体制を保護する役割を持つ」「制度」は必要ないかといえばそうではない。純粋資本主義は主体性を消極化した疎外的な人間を前提することによって安定的なわけであるから、逆に主体的な人間や彼らによって構成される社会を前提すれば、その社会は不安定なものとなるわけである。そこで、「制度がこの欠陥を除去ないし緩和し、体制を保護する役割を持つ」必要はやはりあるということになる。

また山口は、「自律的な景気循環」の「証明を通して資本主義社会が自立的に存続する能力を持っていることが証明されているという考え方は「間違っている」とし、「資本主義の本質は経済の自律性ないし自立性にあるのではなく、景気が循環する過程で不況期という社会的に不安定な局面を経過せざるを得ない点、あるいはそのように景気が循環すること自体、に不安定性があるということが本質の一面として強調されるべきではなかったか¹¹⁾と主張する。これもやはり、「景気が循環する過程で不況期という社会的に不安定な局面を経過せざるを得ない点」に注目するか、あるいは景気の自動的な反転・回復とそれに伴う生産力の発展という「自律的な景気循環」や「経済の自律性ないし自立性」に注目するか、という問題である。

原理論ではどちらも説くのであるが、より強調するのはどちらかということになる。システム論としては「自律的な景気循環」による「自己再生能力」を明らかにすることに力点を置くべきであろうし、社会理論としては「不況期という社会的に不安定な局面」を指摘することに力点を置くこ

とになろう。私は、原理論はシステム論としての性格を持つことからいって、前者を強調すべきであろうと考えている。

さらに山口は「資本主義という社会体制は市場経済以外の力、つまり非市場経済という他力を借りないで、自力だけで継続的に存続しうるシステムとはいえない」とし、「その意味では、資本主義には自立性＝自己再生能力はないということを明確にすべき¹²⁾だと述べる。しかし、原理論で説く純粋資本主義のシステムにおいては、市場経済的な原理だけで行動する人間とその集合体である「虚構の社会」を前提にしているのだから、それは「自力だけで継続的に存続しうるシステム」を形成するということができる。それに対し、現実的な人間やそれによって構成される社会を前提すれば、「市場経済以外の力、つまり非市場経済という他力を借り」なければ、その社会は存続しえない。「資本主義には自立性＝自己再生能力はない」というのは、そのような形式的なシステムとは区別される内実を持った社会において指摘されることである。

山口は「存続には他力が必要であることを示すために、あたかも自立しているかのように描かれた資本主義経済の想定が必要であり、いくつかの仮定ないし条件をおけば、この想定は可能であると考えているのである。これがいわゆる純粋資本主義であるが、この想定はあくまでも他力が必要であることを説明するための便宜としてのことである¹³⁾と説明する。「あたかも自立しているかのように描かれた資本主義経済の想定」は、「他力が必要であること」を示すために必要であるというのである。

しかし、そのような「自立しているかのように描かれた資本主義経済の想定」は、資本主義の存続の根拠をこの社会が部分的にせよ有していることを、経済システムという一面において示しているのではないだろうか。とはいえ、疎外的な関係を前提しなければ純粋資本主義は存在しえない、ということがこの社会の限界を示しているといっただけでよい。そこで、資本主義とは何かという本質を明らかにする場合、存続の根拠となるポジティブな面を示すことと、存在の限界を意味するネガティブな面を示すことの両方が必要であるということになる。それでは、どのような手順でそれを説

明するのが有用な方法となるであろうか。

説明の手順としては、まず存続し繰り返すものとしての資本主義のシステムを純粋資本主義において明らかにすることが必要であり、それが基礎となる。そこでは市場経済にフィットした疎外的な人間という「仮定」が置かれている。次いで、その「仮定」は現実の社会では存在しえないことから、資本主義社会は不安定性を抱えており、それゆえ「自立性」を支えるために社会の補強装置が必要となることが、中間理論において示される。この補強装置が非市場の制度である。

原理論の純粋資本主義に、資本主義の歴史的な各段階に特徴的な非市場の制度を追加すると、各段階の資本主義の特殊性を明らかにすることができる。それを説くのが、中間理論としての段階論である。段階論は現実の社会を対象にしており、資本主義社会の不安定性とそれに対する補強装置を明らかにするものといってよい。資本主義社会は、常に市場と非市場が並存していて、その両者の組み合わせで資本主義社会の類型化が生まれる。そのような組み合わせ＝資本主義の類型化を歴史的な時間軸に沿って捉えると、いくつかの歴史段階の典型国とそれを中心にした世界編成を示すことになる。

資本主義社会は、不安定性とそのために必要な社会制度としての補強装置が存在する社会である。しかし、その補強装置自体もまた、新たな不安定性を生み出すものとなる。かくして、資本主義の安定性を説く原理論のほかに、不安定性を前提とした中間理論である段階論が必要となるわけである。

12) 285頁。

13) 同上。

注

- 1) 山口重克『現実経済論の諸問題』御茶の水書房、2008年、280頁。
- 2) 同上。
- 3) 280-281頁。
- 4) 280頁。
- 5) 同上。
- 6) 281頁。
- 7) 同上。
- 8) 280頁。
- 9) 283頁。
- 10) 同上。
- 11) 284頁。